環境を決定づけたアメリカ

大学を卒業した石黒は、大手設備会社である三機工業で3年間の社会人生活を送ったあと、再び名古屋工業大学に戻り大学院へ。1967（昭和42）年に修士課程を修了した。建築に自然を生かしたいという思いは、ますます強くなる。自然を生かすためには、設備をなくさなければならないことはわかっている。現実的には難しいにしても、自然を最大限優先し、足りない部分を機械で補完する建築をつくりたかった。

そのためにはまだまだ設備を勉強する必要があると認めざるを得なかった。そこで設備の先端を行っていたアメリカに学ぶことを決意する。そして、ある設備設計事務所とコンタクトを取り、論文や図面を送ったりするなど、アピールしていった。

アメリカで働くには、Working Visaが必要になる。そのためにはコンタクトをとっていたアメリカの会社が移民局に申請し認められなければならなかった。認められて初めて名古屋にあるアメリカ領事館から呼び出しがかかり、交付そして渡航が認められることになる。コンタクトを開始して約1年、ついにVisaの交付を受けた。

1968（昭和43）年、アメリカに向けて旅立った。初めての飛行機、当時はホノルルまでの便しかなく、日付変更線を通過した時には証明書が発行された。持ち出しは500ドル日本円2万円の時代である。

採用してくれたのはニューヨークのマンハッタンに拠点を構えるシスカ&ヘネシー社。40年の歴史を持ち所員350人を抱え、設備設計ではアメリカでも群を抜いて大きな事務所だった。世界のさまざまな国から人が集まっており、アメリカの事務所というよりインターナショナルな事務所という観を呈していた。日本人は石黒一人である。

さまざまな国から人が集まっているということは、その数だけ文化やものの見方・考え方、さらには行動パターンがあることを意味する。石黒がアメリカで学んだのは、この多様性であり、多様性の輪の広さだった。日本人がその考え方において、最も不得意としている部分であろう。

シスカ&ヘネシー社には1970年までの2年間勤務し、国際的あるいは大規模なプロジェクトにも参加した。南アフリカのヨハネスブルグの放送局は、建物自体は一つだが、出入り口が別々に存在し、建物内部も完全に区画された。人種が違うという理由からである。また、ハーバード大学の地域冷暖房計画は、すべてが完成するのは2000年を超えるという超ロングスパンのプロジェクトだった。

Syska & Hennessy My Office（144 E.39th New York）

石黒が渡米した当時、アメリカはベトナム戦争中だった。毎週日曜日の午前には、今週の戦死者が流されていた。石黒を含めアメリカ以外から来ている人は、入社と同時に社会保障番号をもらい、税金を払い、利益を得ている以上、徴兵の声がかかれば応